

戦略的創造研究推進事業

(社会技術研究開発)

平成28年度研究開発実施報告書

「持続可能な多世代共創社会のデザイン」
研究開発領域

研究開発プロジェクト

「空き家活用によるまちなか医療の展開と
まちなみ景観の保全」

研究代表者 後藤 春彦

早稲田大学大学院創造理工学研究科 教授

目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の要約	2
2 - 1. 研究開発目標.....	2
2 - 2. 実施項目・内容.....	2
2 - 3. 主な結果.....	2
3. 研究開発実施の具体的内容	3
3 - 1. 研究開発目標.....	3
3 - 2. ロジックモデル.....	4
3 - 3. 実施方法・実施内容.....	5
3 - 4. 研究開発結果・成果.....	6
3 - 5. 会議等の活動.....	12
4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	13
5. 研究開発実施体制	13
6. 研究開発実施者	14
7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	19
7 - 1. ワークショップ等.....	19
7 - 2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など.....	19
7 - 3. 論文発表.....	19
7 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）.....	20
7 - 5. 新聞報道・投稿、受賞等.....	20
7 - 6. 知財出願.....	20

1. 研究開発プロジェクト名

空き家活用によるまちなか医療の展開とまちなみ景観の保全

2. 研究開発実施の要約

本提案では、少子高齢化などに起因するまちづくりの人材不足を背景に、重要伝統的建造物群保存地区である奈良県橿原市今井町において、「まちなみ景観とまちなか医療の相互補完による持続可能な重伝建保存」をまちづくりのビジョンとして掲げ、今井町に隣接する奈良県立医科大学（以下奈良医大）のナレッジとヒューマンリソースを活用し、「まちも元気に、ひとも元気に」をめざす社会実験の場とする。

奈良医大の機能とノウハウを今井町に埋め込んでいくことで、まちなか医療を核とした地域の健康基盤の実現をめざし（「ひとも元気に」）、その過程で町並みを整え、まちづくり人材を育むことで、内発的な景観まちづくりの素地を再強化する（「まちも元気に」）という、「ひと」と「まち」の健康を同時に向上させる好循環の仕組みを作り出すことをビジョンに掲げている。

2 - 1. 研究開発目標

- 目標①：住民自治の土台となるオーラルヒストリーの編纂
- 目標②：ICTを活用した独居高齢者のための健康見守りシステムの開発
- 目標③：空き家の適切な利活用促進のためのTMO設立
- 目標④：学生主体の自主防災組織の設立

2 - 2. 実施項目・内容

- Step-1：自治の伝統と保存運動に関するオーラルヒストリーの編纂
- Step-2：ICTを活用した高齢者の健康見守りシステムの開発
- Step-3：空き家活用を促進する「重伝建版TMO」の設立
- Step-4：医大の機能を重伝建にインフィルする「今井町アネックス」の実現
- Step-5：学生団体をまきこんだまちづくり活動の推進
- Step-6：研究成果の総括と政策提言

2 - 3. 主な結果

平成28年度は、Step1のほか、Step-2,3のうち準備段階にあたる項目を実施した。

- ・オーラルヒストリー調査およびオーラルヒストリー編纂（Step-1に該当）
今井町の住民のうち、協力を得られた109人から、町内での生活の様子や変遷に関する情報を収集し「まちづくり知」として編纂した。またその成果報告会を開催し、仮製本した未定稿版の冊子を配布して、参加者総勢69人で成果の読み合わせを行なった。
- ・高齢者の健康見守りシステム開発準備（Step-2の準備段階に該当）
健康見守りシステム開発にあたって活用すべきICTの要素技術についての検討を進め、センサー技術の組み合わせ方法等を整理した。また運用体制の構築にむけて、①ボランティア、②家族・親族、③警備会社という三主体との連携可能性について整理した。また地域の若者に対するヒアリングを実施し本年度(H29)以降の協力体制について

確認した。

- ・空き家の調査（Step-3の準備段階に該当）

市役所等地元組織と連携して、空き家の現状に関する調査を進めるとともに、これまで各団体で行われてきた既往の調査成果を収集し、統合的に再整理した。また、奈良医大の学生に対するヒアリングを実施し本年度(H29)以降の協力体制について確認した。

3. 研究開発実施の具体的内容

3 - 1. 研究開発目標

本提案では、地域の多世代にわたる住民とともに、前掲のビジョンの実現に向けて継続的なまちづくりをめざすなかで、以下の2つのリサーチクエスチョン（RQ）を設定し、研究開発を進める。

（1）全体目標およびリサーチ・クエスチョン

- ・[RQ1] 多世代共創によってまちづくりに取り組む際に、ソーシャルキャピタルの成熟度をいかに計量化し、可視化することができるか？ また、それをもとに「まちづくり知」をどのように蓄積し、「活動の継続と改善」「暗黙的ノウハウの一般化」に活かすことができるか？（→領域RQ7「世代共創の程度や多世代型ソーシャルキャピタルに関する指標」に対応）
- ・[RQ2] 多世代（特に若い世代）のまちづくり活動への参画を深化させるプロセスと動機付けにはどのようなものがあるか？ 参画を深化・継続させる「まきこみプロセス」とはどのようなものか？（→領域RQ2「若い世代の参加動機付け」、領域RQ3「参加の制度化」に対応）

（2）今年度の目標

- ・オーラルヒストリー調査およびオーラルヒストリー編纂
- ・高齢者の健康見守りシステム開発準備
- ・空き家の調査準備

（3）背景

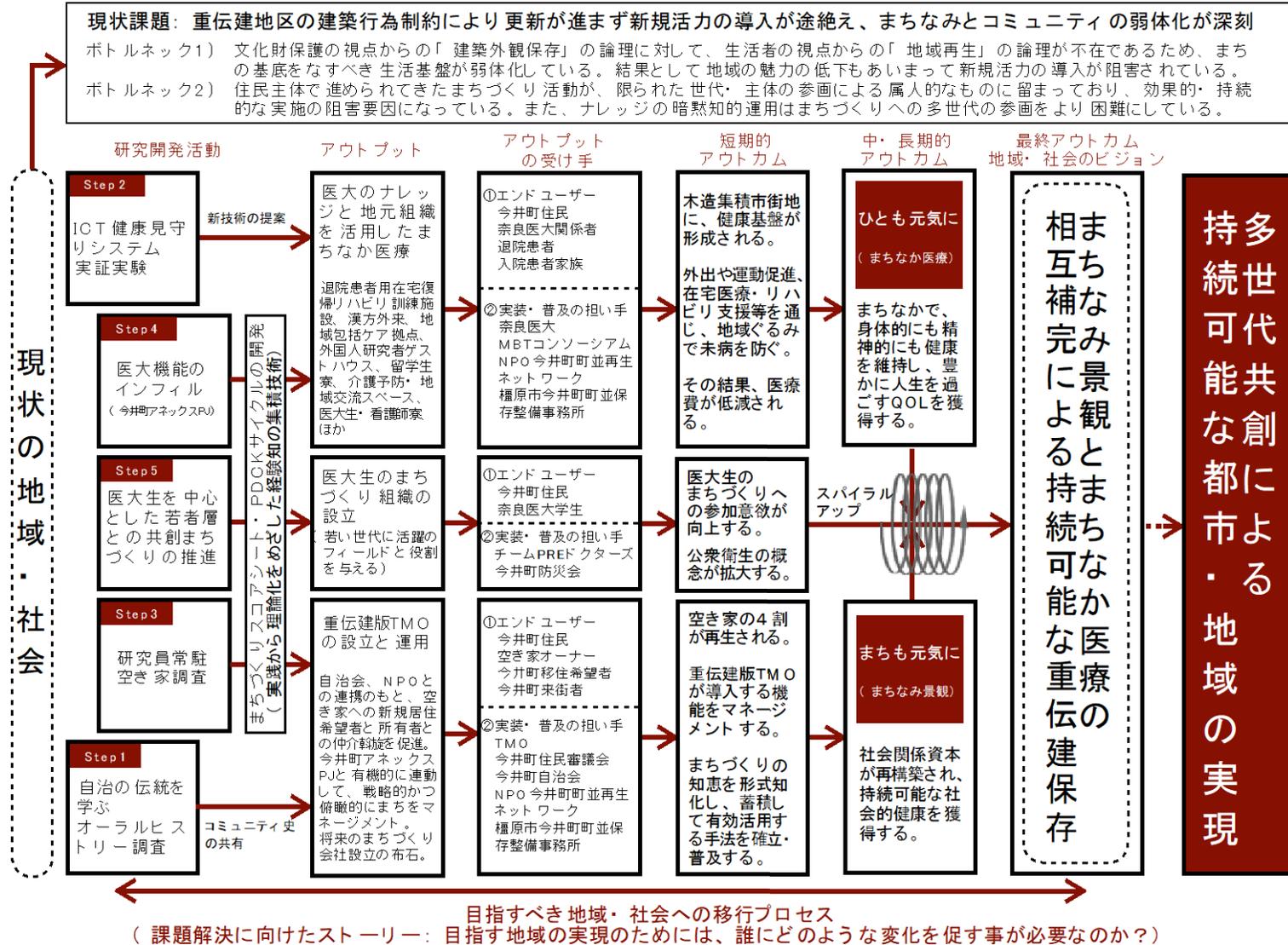
重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）の制度設計のモデルとなった奈良県橿原市今井町は、住民の自治により長年町並み保存に取り組んできたが、近年以下のような課題を抱えている。

- ①町並み保存運動から約四半世紀が経過し代替わりの時期を迎え人材不足に陥っている。
- ②住民の高齢化がすすみ、独居老人や身寄りのない高齢者が増加している。
- ③空き家が増加し、その数は82件に達し、町並み景観への影響が深刻化している。
- ④コミュニティの希薄化により、木造市街地の防災力の低下が懸念されている。

こうした問題は全国的に見られる現象であるが、特に今井町は重伝建であるがゆえに、都市更新に対して多くの規制がかけられていることがボトルネックとなり、とても深刻な状況にある。

こうした状況に対して本提案は、「まちなみ景観とまちなか医療の相互補完による持続可能な重伝建保存」を今井町のビジョンとして掲げ、今井町を「まちも元気に、ひとも元気に」の実現をめざす社会実験の場とするものである。

3 - 2. ロジックモデル



3-3. 実施方法・実施内容

(1) オーラルヒストリー調査・編纂

① オーラルヒストリー調査

研究代表者の既刊書籍「まちづくりオーラルヒストリー」に纏められた手法に基づいて調査を進めた。(i) 自治会・住民団体を通じてヒアリング調査協力者を募った。(ii) 対象地に関する年表や地図などの基礎資料をまとめることで、調査中に聞き出すことができそうな項目を整理し、編纂作業を効率化するための「ヒアリングシート」を作成した。また、事前に複数の住民に予備調査を実施し、調査を通じて聞き出しておくべきキーワード集を作成した。(iii) ヒアリングは二人一組とし、基本的に調査協力者の自宅で行った（自宅を訪問して調査を行ったのは、写真などヒアリング内容に関連する資料を偶発的に収集できる可能性があるため）。



写真 1 「まちづくり
オーラルヒストリー」
後藤春彦 他 著 水曜社 2005.4

② オーラルヒストリー編纂

調査時に協力者から録音許可が得られた場合には、後日テープから文字に起こし、それ以外の場合には、ヒアリング時のメモを清書することで、テキスト情報化した。得られたテキスト情報を、協力者による内容確認を受けたのち「テーマ」「時代」「空間」を軸に整理した。そのうえでそれらの情報を類似のトピックごとにまとめて、可能な限り読みやすい内容に編集し冊子形式にまとめた。

③ 成果報告会

調査協力者である住民に対して調査成果を共有・還元するために、成果報告会を開催した。参加者は、調査協力者全員に対して招待状を送付して広く募った。会の内容は、編纂された口述史の読み合わせを基本としつつ、随時出席者への質問などを交えてディスカッションするなど、双方向・参加型のものとした。

(2) 高齢者の健康見守りシステム開発準備

① ICT見守りの要素技術把握

健康見守りシステム開発が全国的に試行される中で、本プロジェクトチームが目指している「医療・福祉まちづくりと連携した健康見守りシステム」に適した要素技術の組み合わせ方法について、開発の早い段階で把握しておく必要があるとの認識のもと、各種関連要素技術の性質について整理した。

具体的には、まず、見守りシステム構築に関する研究蓄積を有する奈良県立医科大学の協力を得ながら、研究協力者である「MBTコンソーシアム」参加企業の関連システム開発事例をレビューするとともに、それぞれにおいて活用されている、具体的なデバイスおよび運用体制を洗い出した。そのうえで、「医療・福祉まちづくりと連携した健康見守りシステム」構築にあたって組み込むべき要素技術の候補を抽出し、それらを採用する上での課題を把握した。

② 技術適用方法検討

把握された要素技術を、本プロジェクト対象地に適用させるための、具体的な方法を検討した。特に、他の事例で目下開発・試験されている高齢者の健康見守りシステムは、サ

ービス運用体制の構築と維持に大きな課題を抱えていることが把握されたことから、サービス運用の担い手候補とその特徴を整理した。またその結果、地域の学生が運用の一部を担うことの有用性もあると考えられたため、研究協力者である奈良県立医科大学の学生団体（2団体）に対して、参加意向に関するヒアリングを実施した。

（3）空き家の調査

① 既存調査成果物の整理

今後予定している、今井町における本格的な空き家調査の実施に先立ち、「橿原市教育委員会今井町並保存整備事務所」へのヒアリングおよび、今井まちなみ交流センター「華薨」内資料室での文献調査を行い、研究代表者らが当プロジェクト採択前に調査した成果を含む、建物・街区割・町並・景観等に関する既存の調査成果物について整理した。

② データベースの構築方法検討

空き家調査結果を、今後のまちなみ景観維持にあたって活用しやすい形式で保存・蓄積する形式を模索するために、関係各所（今井町並保存整備事務所、NPOなど）における空き家情報管理の実態や、その活用状況について、関係者に対するヒアリング調査を実施した。

またその上で、空き家情報の共通データベースの構築方法を改めて検討した。また本プロジェクトでは、まちなみ維持活動の支援組織(TMO)の構築をめざしており、空き家情報に関する共通データベースの主な活用主体としては当該TMOが想定される。そこで、データベース構築に先立ってTMOのすがたを想定しておくために、空き家管理など当プロジェクトに類似した目標を掲げる支援組織に関する事例情報を収集し、特にその機能・役割、組織形態、資金調達方法などに着目して整理した。

③ 学生の参画方法検討

本プロジェクトで目指す「多世代共創」は、まちづくり活動の持続性を担保する上で不可欠な要素であり、まちなみ維持活動の支援組織(TMO)についても、若年層の参画を促す仕掛けを取り組む必要がある。特に本研究は、研究対象地近隣に位置する奈良県立医科大学と共同で取り組んでいるものであり、医大生を中心とした若者の参画を推進するために、受け入れ態勢や参画上の課題について具体的に検討する必要がある。そこで、特に地域活動を志向している学生団体と議論を重ねて、まちなみ維持活動に対する若年層の参画方法とその課題について整理した。

3 - 4. 研究開発結果・成果

（1）明らかになったこと

①オーラルヒストリー調査・編纂

オーラルヒストリーを丁寧に拾い上げ編纂する中で、生活の記憶や知恵をふくむ「まちづくり知」を形式知化して蓄積することが可能となった。また報告会の読み合わせでは、触発された参加者の記憶がさらに呼び起こされ、またそれら「まちづくり知」を継承させる方法に議論が及ぶなど、住民が編纂に主体的に関わる「場」の有効性が明らかになった。今後は、こうして蓄積された「まちづくり知」を、まちづくり活動の継続と改善にどのように活かすことができるかに着目していく。

②高齢者の健康見守りシステム開発準備

医大学生のまちづくり活動への意欲の背景には、地方大学ゆえの地域貢献や交流に対す

る高い関心がうかがえた。今後は、若年層のまちづくり活動参画を恒常化させ、そのプロセスを記録することで、参画深化プロセスと動機付けについて深堀していく。

③ 空き家の調査

「チームプロドクターズ」をはじめとする学生の社会活動においては、安価に利用できる空き家の存在が重要な役割を果たしていた。今後は、若年層のまちづくり活動参画を恒常化させ、そのプロセスを記録することで、参画深化プロセスと動機付けについて深堀していく。

(2) 今年度の進捗・成果

① オーラルヒストリー調査・編纂

a) オーラルヒストリー調査・編纂

ヒアリング調査では、住民109名の調査協力を得た。収集した思い出についての「語り」を分類した結果、「なりわい」「まちなみ」「まちづくり」「まなび」「つながり」の5分類に大別することができた。そこで、これら5分類を軸に口述史を編纂した。編纂内容には、これまで公式の歴史に記録されてこなかった、生活の記憶や知恵など、昨今徐々に失われつつある地域の「市井の歴史」を描き出す事ができた。編纂された内容の概略は以下の通り：

「なりわい」

江戸時代の今井町は「大和の金は今井に七分」と言われるほど栄えていたが、昭和中期～後期にも已然として商店がたくさん建ち並んでおり、商業の中心地であった。日用品はすべて町中で調達でき、環濠内だけではなく環濠外の人々も、買い物のために今井町へ来訪していた。そのころの商店の中には、人々の記憶に強く残っているものが多数あり、特に商店が「遊び場」として記憶されている場合が多かった。しかし、平成以降は商業の衰退が激しく、時代の変化のありさまに関する語りが多く聞かれた。

「まちなみ」

かつての今井町は堀に囲まれており、外部からの侵入者を許さない町だった。しかし、1993年に重要伝統的建造物群保存地区に選定され、修景が進むにつれて、その貴重な町並みを見に全国から多くの人々が訪れるようになった。昭和中期ごろの思い出の語りとしては、建物が作り出す町並み以上に、環濠や飛鳥川など自然環境による景観構成要素に関する事項が、多くの住民に共有されていた。また建物に関しては、「つし二階」など地域に特徴的な町家のつくりが、今でも多くの住宅に残って使用されていることが、多くの証言から明らかになった。

「まちづくり」

特に環濠内において、住民同士による地縁組織が強く根付いていることが把握された。なかでも「隣組」の活動は現在も行われており、その代表的な活動内容としては、「お地藏さん」「大神宮さん」と呼ばれる祭事が挙げられる。しか近年は、高齢化にともなって、活動の衰退がみられる。

「まなび」

昭和中期前後における子供の遊び・生活に関しては、経済成長の途上で物質的には豊かとはいえない状況が切実に語られた一方で、そのなかで工夫を施しながら、地域住民に囲まれた環境で子どもたちが成長していた様子が、多くの語りから伺えた。把握された主な遊び場は、寺社や道端、周囲の田、川などであり、近隣の屋外空間の多くが、子供の遊び場にもなっていたことが分かる。

「つながり」

今井町では、現在でも家族や近所付き合いによる住民間の強い「つながり」があることが把握さ

れた。ただしそのような住民間の「つながり」は、昭和中期以降現在に至るまで弱化の傾向にある。特に、隣近所で井戸・トイレ・お風呂といった設備や、什器・調味料などを共同利用・貸し借りするといった、生活の一部を近隣と共有する生活習慣についての語りが多く聞かれた。

b) 成果報告会

以上の成果をもとに、2017年2月8日に、今井まちなみ交流センター華薨にて、「今井町思い出調査成果報告会」を開催し、調査成果の概要を発表するとともに、仮製本した未定稿版のオーラルヒストリー冊子を配布して読み合わせを行なった。参加者は総勢68名であった。報告会中は、読み合わせた内容に触発された住民が関連する思い出を追加で発表したり、まちの記憶が徐々に失われつつある現状や、今後の伝承方法に関する課題などについて問題提起する場面も見られた。

c) 多世代共創への有用性

成果報告会での読み合わせにおいて、参加者らによる自主的な問題提起や議論が活発にみられたことは、共通の記憶や知恵(まちづくり知)を共有する「場」の存在が、参加者の記憶を更に呼び起こし、また住民の志向を地域の将来に向けた影響を持つことを示していると考えられる。加えて調査・編纂の段階でも、学生調査員がヒアリングをすすめるに連れて、調査協力者自身の中で、地域に対する記憶や知恵が想起・整理されることが明らかとなった。

このように、オーラルヒストリーの調査・編纂・共有に関する一連の作業は、調査協力者を地域の時間軸の内に自ら「再定置」する効果を有していると考えられる。そこで、本提案で想定している「みっつの多世代」(図1)と、本作業の関係性をより具体的に考察した。

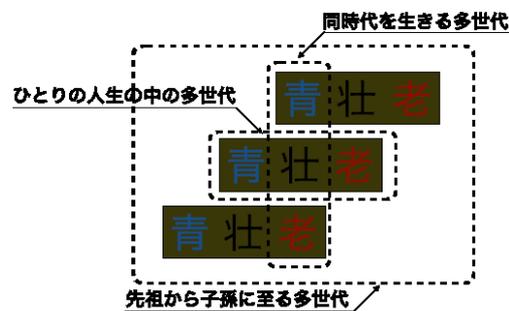


図1 みっつの多世代

「同時代を生きる多世代」

本プロジェクトでは、主に「MSS(まちづくりスコアシート)」の開発を通して、同時代を生きる多世代による共創まちづくりにアプローチするが、加えてオーラルヒストリーもまた、この種の多世代共創に資するものである。

本調査では、地域での生活に関して見識の少ない学生調査員が、調査協力者に対して聞き取りを行っている。価値観の大きく異なる両者がそれぞれの事柄に対して得る印象は、当然大きく異なる。そのことが、ヒアリング対象者の自らの経験や思い出話を「客体化」することに大きく貢献していると考えられる。また、思い出話に対する他世代からのリアクションは、語り手自体にとっても新鮮であり、そのことがさらなる思い出話の想起に貢献しているとも考えられる。

「先祖から子孫に至る多世代」

オーラルヒストリーは、先祖から累々と蓄積されてきたまちの生活の記憶を、記録・継承するものであり、先祖から子孫に至る多世代共創のツールである。

公的な史実として保存されることの少ない、市井の歴史である生活の記憶や知恵が、口述史として保存され、後世に読み継がれることは、先祖から子孫に至る多世代共創の有効な手法である。さらに、自身の思い出が生活史の一部として保存されることは、自らの何気ない思い出が後世に継がれていくことを住民に想起させ、過去から未来に向けたまちの変遷の中に、自らを定置することや、それによる意識変革を促進させる。そのことは、地域運営やまちづくりに関する「無関心層」を減少させ、より多くの住民による関与を促し、ひいては「多世代共創」の基盤を強化するものである。

「ひとりの人生の中の多世代」

本プロジェクトでは、主に「まちづくり人生ゲーム」の実践を通して、ひとりの人生の中の多世代による共創まちづくりにアプローチするが、加えてオーラルヒストリーもまた、この種の多世代共創に資するものである。

本調査では、調査協力者に対し、子供時代から現在にむけて生活の様子を遡るような形でヒアリングを実施した。この過程を調査協力者がたどることは、自らの人生をあらためて振り返ることであり、また、他の世代の異なる調査協力者の生活の変化を知ること、自らの将来を見つめる機会ともなる。この様に、自らの過去を振り返ること、未来を想起することで「ひとりの人生の中の多世代」が意識され、それぞれの年齢に応じた社会的役割を果たしあうかたちでの多世代共創が促される。

②高齢者の健康見守りシステム開発準備

a) ICT見守りの要素技術把握

奈良県立医科大学と共同で、「医療・福祉まちづくりと連携した健康見守りシステム」構築にあたって組み込むべき要素技術の候補を抽出し、詳細なレビューを通して検証した結果、以下の知見を得た。

「ハードの構築」

- ・長期間のモニタリングには「ビーコン+小型通信デバイスの組み合わせ」が適する。
- ・短期間の詳細なモニタリングには「(通信機能のない)バイタル収集センサー」が適する。

「ソフト(運営体制)の構築」

- ・ボランティア等による運営リソースを活用可能である。
- ・家族・親族による運営リソースを活用可能である。
- ・警備会社との連携による運営リソースを活用可能である。

ICTを活用したみまもり技術の開発に関しては、昨今主に「ハード(センサー等機器)」の面での進歩が著しいものの、それら技術を住民の生活に浸透させるための「ソフト(運営システム)」構築については、研究蓄積が十分でない。参考とした事例の中では、旧来のコミュニティ拠点を活用しているものが散見されたが、持続可能な運営体制を確立しているといえるものはなく、その点が本プロジェクトにおいても課題となると考えられる。

b) 技術適用方法検討

ソフト(運営システム)構築にあたって、運営の担い手となりうる、ボランティア/家族・親族/警備会社について、研究対象地の現状を把握した。

ボランティアについては、住民活動が一定程度あることから担い手がいると思われる一方で、それらの課題である高齢化に対する解決策を求める必要性があることから、若年層の参画の重要性が把握された。家族・親族については、現状の家族・親族資源を利活用しつつそれでは補えない部分は地域によって補うスキーム構築の重要性が把握された。警備会社については民間企業との連携により、新たな支援サービス創出のための、ビジネスモデル構築が必要であること

が把握された。

また、「地域」を支える担い手として重要性が高いと考えられる、学生団体とのディスカッションを通して、みまもりシステム運営に若年層を巻き込むうえでの課題を把握した。そのなかで、毎年入れ替わる学生の「地域学習」に対する意欲をいかに受け止めるかということが、継続的な学生の参画には必須であることが確認された。また、学生の地域活動参画と、奈良県に根付く「東洋医学」との親和性について、下記のような知見を得た。

- ・東洋医学は、科学技術の未発達で会った古代中国において、触る、見る、嗅ぐといった人間の5感を活用した診断方法を体系化した医学分野であることから、高度な施設・設備を必要とせず、学生でも比較的容易に知識を実践することができる。
- ・東洋医学は「未病を治す」という概念を有していることから、在宅医療や福祉など、「地域」で展開される今日の医療福祉求められる「予防」に対する知識が体系化されており、学生の本業である知識習得により、比較的容易に食生活や生活習慣を通じた助言ができる。

③ 空き家の調査

a) 既存成果物の整理

今井町並保存整備事務所へのヒアリングならびに資料庫における文献調査を通して、今井町の建物、街区割、町並等に関連する既往調査成果物の把握を行った。把握された主な調査資料は下記のとおりであった：

- ・『今井の建物』『今井の建物Ⅱ』
- ・渡辺定夫『今井の町並み』1994
- ・『今井町住環境整備誘導計画策定調査報告書(現況課題編)』平成4年
- ・『平成5-7年度 橿原市今井町重要伝統的建造物群保存地区 街なみ環境整備事業計画策定調査報告書』、橿原市、平成8年3月
- ・『歴史的環境保全市街地整備計画 調査報告書』、財団法人国土開発技術研究センター、昭和54年3月
- ・『昭和52年度～56年度 今井町調査報告書(歴史的環境保全市街地整備事業)』、建設省・文科省・財団法人国土開発技術研究センター・橿原市、昭和59年3月

b) データベースの構築方法構築

現状、空き家に関する情報については、今井町並保存整備事務所内のデータベースシステムにおいて、各種補助金申請に関する情報が整理されているほか、空き家の需給に関するインフォーマルな情報については、必要に応じて都度、同事務所とNPO今井まちなみ再生ネットワークの組織長同士が共有している現状を把握した。また、昨今空き家の活用が活発化しつつある一方で、高齢者の施設入居や子世帯による呼び寄せ等による「潜在的な空き家」の把握ニーズが高まっている事が明らかとなった。そうした中、データベース構築の方向性としては、今後設立を想定しているまちなみ維持支援組織の運営のため、「しもたや」など街路に面した店舗空間のみ空き部屋となっている物件把握を行うことの可能性が検討された。

また情報収集に関して、プライバシー保護の観点から課題はあるものの、高齢者の健康見守り技術とのリンクによって、居住者の健康状態が悪化しているなどのことによる「潜在的な空き家」の把握の可能性も検討された。

さらに、今後設立を推進するまちなみ維持活動の支援組織(TMO)については、事例把握から下記のような機能・役割、組織形態、資金調達候補として挙げられた。

「機能・役割」

- ・空き家の再生

- ・空き家バンク
- ・その他公的施設管理
- ・プロモーション
- ・シンクタンク

「組織形態」

- ・民間企業型
- ・中心市街地活性型(TMO)

「資金調達」

- ・政府系ファンドの活用

c) 学生の参画方法検討

学生の参画方法を、関係者らへのヒアリング調査などに基づいて検討したところ、空き家および空き部屋など住宅空間に近接した安価に活用できるスペースが、彼らの社会活動参加において重要な役割を果たしている現状が把握された。そのため、恒常的に多世代をまちづくりの担い手として確保するには、そうした空き家・空き部屋を単純な市場原理に委ねたテナント貸しとしてではなく、TMOのような中間組織が管理し、住環境の維持という目的のもとで、学生が活動するスペースを確保することが必要であると考えられる。また、地域のイベントや、隣組など地縁組織との交流の可能性については、比較的参加が容易な単発イベントへの学生の参加に関しても、住民と学生を積極的に繋ぐ機能が不足していることが主な要因となり、学生参画を妨げていることが把握された。

3 - 5. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2016/8/8	若年層参画に関する協議	橿原市「寺塾」	チームPREドクターズ幹部とともに今後のプロジェクト推進方法について協議
2016/8/8	事業推進方法に関する協議	今井町公民館	今井町自治会長とともに今後のプロジェクト推進方法について協議
2016/8/8	事業推進方法に関する協議	今井町町並み保存会会長自宅	今井町並み保存会会長とともに今後のプロジェクト推進方法について協議
2016/10/19	事業推進方法に関する協議	橿原市役所	森下豊橿原市長とともに今後のプロジェクト推進方法について協議
2016/10/19	空き家の実態に関する調査	今井町並保存整備事務所	今井町並保存整備事務所とともに空き家の実態について協議
2016/12/27	ICT見守り開発に関する協議	早稲田大学	専門家とICT見守り開発に関する協議
2016/12/5	事業推進方法に関する協議	今井町町並み保存会会長自宅	今井町並み保存会会長とともに今後のプロジェクト推進方法について協議
2016/12/5	空き家利活用/TMOに関する協議	今井町並保存整備事務所	今井町並保存整備事務所・NPO今井まちなみ再生ネットワークとともに空き家利活用方法やTMO設立について協議
2016/12/5	若年層参画に関する協議	奈良県立医科大学	東洋医学研究会（学生団体）とともに今後のプロジェクト推進方法について協議
2016/12/9	空き家利活用/TMOに関する協議	今井町並保存整備事務所	今井町並保存整備事務所とともに空き家利活用方法やTMO設立について協議
2017/2/9	空き家利活用/TMOに関する協議	今井町並保存整備事務所	今井町並保存整備事務所とともに空き家利活用方法やTMO設立について協議

4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

初年度であった本年度は、今後の社会実験等に向けた準備として、オーラルヒストリー編纂を実施した。オーラルヒストリー編纂に関しては、未定稿ではあるがその成果を住民と共有する企画を実施し、総勢69名を動員した。その過程で、住民の「先祖から子孫に至る多世代」を中心とした多世代共創を実践することができた。

また、地域の様々なステークホルダーを巻き込んだワークショップ実施、まちづくり集会の実施などのための拠点として利用するために、今井町内に「早稲田大学MBT研究所今井町分室」を開設するべく、準備を進めた。当該分室は、2017年4月より利用を開始し、本研究開発で得られた成果の地域への実装を加速していく。

5. 研究開発実施体制

(1) オーラルヒストリー編纂グループ

- ①後藤春彦（早稲田大学大学院創造理工学研究科・教授）
- ②オーラルヒストリー調査、オーラルヒストリー編纂

(2) 健康見守りシステム開発グループ

- ①細井裕司（奈良県立医科大学・理事長兼学長）
- ②高齢者健康見守りシステム開発、ヘルスリテラシー・セルフメディケーション向上

(3) 重伝建版TMO設立グループ

- ①有賀隆（早稲田大学大学院創造理工学研究科・教授）
- ②空き家の悉皆調査、重伝建版TMO設立

(4) 今井町アネックスPJ推進

- ①山村崇（早稲田大学大学院創造理工学研究科・助教）
- ②今井町アネックスPJハード事業およびソフト事業

(5) 学生まちづくり組織グループ設立

- ①森本章倫（早稲田大学大学院創造理工学研究科・教授）
- ②学生まちづくり組織設立（チームPREドクターズ）

6. 研究開発実施者

研究グループ名：オーラルヒストリー編纂グループ

	氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
○	後藤 春彦	ゴトウ ハルヒコ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	教授
	山村 崇	ヤマムラ シュウ	早稲田大学	創造理工学部建築学科	助教
	山田 宮土理	ヤマダ ミドリ	近畿大学	建築学部	助教
	林 書嫻	リン ショカン	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	研究助手
	高嶺 翔太	タカミネ ショウタ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	研究助手
	馬場 健誠	ババ キヨマサ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	招聘研究員
	吉江 俊	ヨシエ シュン	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	D2
	森田 椋也	モリタ リョウヤ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	D1
	秋間 弘貴	アキマ ヒロタカ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
	市川 正博	イチカワ マサヒロ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
	蔵田 夏美	クラタ ナツミ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
	車戸 高介	クルマド コウスケ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
	小西 一輝	コニシ カズキ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
	小林 大祐	コバヤシ タイユウ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
	今井 梨花	イマイ リカ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
	竹下 祐	タケシタ ユウ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
	竹田 顕哉	タケダ ケンヤ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
	小野 翔大	オノ ショウタ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
	清水 有愛	シミズ アリア	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
	劉 冬晴	リュウ フユミ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
	リム ジョンミン	リム ジョンミン	早稲田大学	建築学科	B4
	石綿 朋葉	イシワタ トモハ	早稲田大学	建築学科	B4
	本田 理沙	ホンダ リサ	早稲田大学	建築学科	B4
	津島 英征	ツシマ ヒデユキ	早稲田大学	建築学科	B4
	渋谷 健太	シブヤ ケンタ	早稲田大学	建築学科	B4
	松本 慎	マツモト シン	早稲田大学	建築学科	B4
	下山 萌子	シモヤマ モエコ	早稲田大学	建築学科	B4

鷹野 泰地	タカノ タイチ	早稲田大学	建築学科	B4
-------	---------	-------	------	----

研究グループ名：健康見守りシステム開発グループ

	氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
○	細井 裕司	ホソイ ヒロシ	奈良県立医科大学	—	理事長兼学 長
	遊佐 敏彦	ユサ トシヒコ	奈良県立医科大学	産学官連携推進センター	助教
	後藤 春彦	ゴトウ ハルヒコ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	教授
	山村 崇	ヤマムラ シュウ	早稲田大学	創造理工学部建築学科	助教
	早田 宰	ソウダ オサム	早稲田大学	大学院社会科学研究科	教授
	林 書嫻	リン ショカン	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	研究助手
	高嶺 翔太	タケミネ ショウ タ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	研究助手
	馬場 健誠	ババ キヨマサ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	招聘研究員
	吉江 俊	ヨシエ シュン	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	D2
	森田 椋也	モリタ リョウヤ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	D1
	今井 梨花	イマイ リカ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
	竹下 祐	タケシタ ユウ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
	竹田 顕哉	タケダ ケンヤ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
	小野 翔大	オノ ショウタ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
	清水 有愛	シミズ アリア	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
	劉 冬晴	リュウ フユミ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
	リム ジョンミン	リム ジョンミン	早稲田大学	建築学科	B4
	石綿 朋葉	イシワタ トモハ	早稲田大学	建築学科	B4
	本田 理沙	ホンダ リサ	早稲田大学	建築学科	B4
	津島 英征	ツシマ ヒデユ キ	早稲田大学	建築学科	B4
	渋谷 健太	シブヤ ケンタ	早稲田大学	建築学科	B4
	松本 慎	マツモト シン	早稲田大学	建築学科	B4
	下山 萌子	シモヤマ モエ コ	早稲田大学	建築学科	B4
	鷹野 泰地	タカノ タイチ	早稲田大学	建築学科	B4

研究グループ名：重伝建版 TMO 設立グループ

氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
有賀 隆	アリガ タカシ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	教授
後藤 春彦	ゴトウ ハルヒコ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	教授
山村 崇	ヤマムラ シュウ	早稲田大学	創造理工学部建築学科	助教
佐藤 宏亮	サトウ ヒロスケ	芝浦工業大学	工学部建築工学科	准教授
遊佐 敏彦	ユサ トシヒコ	奈良県立医科大学	産学官連携推進センター	助教
山田 宮土理	ヤマダ ミドリ	近畿大学	建築学部	助教
林 書嫻	リン ショカン	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	研究助手
高嶺 翔太	タケミネ ショウタ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	研究助手
馬場 健誠	ババ キヨマサ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	招聘研究員
吉江 俊	ヨシエ シュン	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	D2
森田 椋也	モリタ リョウヤ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	D1
今井 梨花	イマイ リカ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
竹下 祐	タケシタ ユウ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
竹田 顕哉	タケダ ケンヤ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
小野 翔大	オノ ショウタ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
清水 有愛	シミズ アリア	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
劉 冬晴	リュウ フユミ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
リム ジョンミン	リム ジョンミン	早稲田大学	建築学科	B4
石綿 朋葉	イシワタ トモハ	早稲田大学	建築学科	B4
本田 理沙	ホンダ リサ	早稲田大学	建築学科	B4
津島 英征	ツシマ ヒデユキ	早稲田大学	建築学科	B4
渋谷 健太	シブヤ ケンタ	早稲田大学	建築学科	B4
松本 慎	マツモト シン	早稲田大学	建築学科	B4
下山 萌子	シモヤマ モエコ	早稲田大学	建築学科	B4
鷹野 泰地	タカノ タイチ	早稲田大学	建築学科	B4

研究グループ名：今井町アネックスPJ 推進グループ

氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
山村 崇	ヤマムラ シュウ	早稲田大学	創造理工学部建築学科	助教

細井 裕司	ホソイ ヒロシ	奈良県立医科 大学	—	理事長兼学 長
後藤 春彦	ゴトウ ハルヒコ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	教授
佐藤 宏亮	サトウ ヒロスケ	芝浦工業大学	工学部建築工学科	准教授
林 書嫻	リン ショカン	早稲田大学	医学を基礎とするまちづく り研究所	研究助手
高嶺 翔太	タケミネ ショウ タ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづく り研究所	研究助手
馬場 健誠	ババ キヨマサ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづく り研究所	招聘研究員
吉江 俊	ヨシエ シュン	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	D2
森田 椋也	モリタ リョウヤ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	D1
リム ジョンミン	リム ジョンミン	早稲田大学	建築学科	B4
石綿 朋葉	イシワタ トモハ	早稲田大学	建築学科	B4
本田 理沙	ホンダ リサ	早稲田大学	建築学科	B4
津島 英征	ツシマ ヒデユ キ	早稲田大学	建築学科	B4
渋谷 健太	シブヤ ケンタ	早稲田大学	建築学科	B4
松本 慎	マツモト シン	早稲田大学	建築学科	B4
下山 萌子	シモヤマ モエ コ	早稲田大学	建築学科	B4
鷹野 泰地	タカノ タイチ	早稲田大学	建築学科	B4

研究グループ名：学生まちづくり組織設立グループ

氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
森本 章倫	モリモト アキノ リ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	教授
遊佐 敏彦	ユサ トシヒコ	奈良県立医科 大学	産学官連携推進センター	助教
林 書嫻	リン ショカン	早稲田大学	医学を基礎とするまちづく り研究所	研究助手
高嶺 翔太	タケミネ ショウ タ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづく り研究所	研究助手
馬場 健誠	ババ キヨマサ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづく り研究所	招聘研究員
吉江 俊	ヨシエ シュン	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	D2
森田 椋也	モリタ リョウヤ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	D1
リム ジョンミン	リム ジョンミン	早稲田大学	建築学科	B4
石綿 朋葉	イシワタ トモハ	早稲田大学	建築学科	B4
本田 理沙	ホンダ リサ	早稲田大学	建築学科	B4
津島 英征	ツシマ ヒデユ キ	早稲田大学	建築学科	B4
渋谷 健太	シブヤ ケンタ	早稲田大学	建築学科	B4
松本 慎	マツモト シン	早稲田大学	建築学科	B4

下山 萌子	シモヤマ モエ コ	早稲田大学	建築学科	B4
鷹野 泰地	タカノ タイチ	早稲田大学	建築学科	B4

7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

7-1. シンポジウム等

年月日	名称	場所	参加人数	概要
2017年 2月8日	「今井町思い出調査」成果報告会	橿原市今井 まちなみ交 流センター 「華薨」	68	オーラルヒストリー調査の成果発表ならびに編纂物（冊子）の住民との読み合わせ

7-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、DVD

- ・ なし

(2) ウェブサイト及びSNSアカウント等構築・運営

- ・ 「医学を基礎とするまちづくり研究所ウェブサイト」、
- ・ <http://pi-mbt.wixsite.com/home>: 2016年立ち上げ。本研究所の活動報告として「今井町思い出調査成果報告会」開催報告や、今井町でのフィールドワークの様子を文章・動画交えて発信。

(主な配信内容)

- ・ (動画) Mayo Clinicの都市づくり —2016年11月14日 「医学を基礎とするまちづくり(MBT)コロキウム」基調講演
- ・ (動画) 市民農園からはじまるまちづくり
- ・ (動画) 健康習慣を支える場所づくり
- ・ (動画) 台湾における「青草」を活かしたまちづくり
- ・ (動画) 「医学を基礎とするまちづくり」紹介

(3) 学会(7-4.参照)以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

- ・ 「医学を基礎とするまちづくり(MBT)コロキウム/『医学を基礎とするまちづくり(MBT)の最先端』国際シンポジウム」、2016年11月14日、早稲田大学大隈記念講堂

【概要】荒井正吾氏(奈良県知事)とPatrick Seeb氏(米国ミネソタ州ロチェスター市 DMC経済開発局長)による基調講演ののち、後藤春彦(当PJ代表者)が登壇し、今井町の事例を交えて「医学を基礎とするまちづくり」について講演を行った。

7-3. 論文発表

(1) 査読付き(0件)

- 国内誌(0件)
- 国際誌(0件)

(2) 査読なし (4件)

- ・ 細井裕司・後藤春彦・中村幸之進：「特別対談 細井裕司×後藤春彦 医学を基礎とするまちづくり(MBT)コロキウム開催へ」、時評 58(10)、pp.152-161、2016.10
- ・ 後藤春彦：「まちも元気に、ひとも元気に」、建設 16-11、pp.4-5、2016.11
- ・ 後藤春彦：「超高齢・縮減社会を見据えた「医学を基礎とするまちづくり」のための空間計画技術」時評 58(11)、p.172、2016.11
- ・ 山村崇：「多世代共創でめざす「まちも元気に、ひとも元気に」-医学を基礎とするまちづくり(MBT)の取り組み-」、地域開発 618、2017.3

7-4. 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

(1) 招待講演 (国内会議0件、国際会議0件)

(2) 口頭発表 (国内会議0件、国際会議0件)

(3) ポスター発表 (国内会議 1件、国際会議 0件)

- ・ 後藤春彦 (早稲田大学)、空き家活用によるまちなか医療の展開とまちなみ景観の保全、持続可能な多世代共創社会のデザイン研究開発領域シンポジウム (主催：国立研究開発法人科学技術振興機構社会技術研究開発センター)、時事通信ホール、2017年3月6日

7-5. 新聞報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿 (1件)

- ・ 医学を基礎とするまちづくりコロキウム開催案内、日本経済新聞朝刊、2016年10月23日版

(2) 受賞 (0件)

(3) その他 (0件)

7-6. 知財出願

(1) 国内出願 (0件)